もういちど自然と建築について話をしよう

第3回　祈りと建築

池田 武邦

池田 武邦（いけだ・たけくに）

1924（大正13年）1月14日、関東大震災の避難先であった静岡県で生まれ、その後神奈川県藤沢市に移り旧制湘南中学時代までを過ごす。40年海軍兵学校入学、43年同校第72期卒業。海軍士官としてマリアナ沖海戦、レイテ沖海戦、沖縄海上特攻の3つの作戦に参加し、最後の沖縄海上特攻で乗艦していた「矢矧」が撃沈されるも漂流後救助され生還。その後大竹の海軍潜水学校の教官となり終戦を迎えた。49年東京大学第一工学部建築学科を卒業。同年山下寿郎設計事務所（現・山下設計）に入社し、日本初の超高層ビル「霞ヶ関ビル」の設計に携わり、67年日本設計事務所（現·日本設計）の設立に参画。「京王プラザホテル」「新宿三井ビル」など超高層ビルを次々に手がけながら、新しい設計組織の構築を目指す。76年同社社長、92年同社会長。自然に対する畏敬を理念に「長崎オランダ村」や「ハウステンボス」などの作品を生み出している。1995年池田塾開設。2001年には長崎県西海市の大村湾に茅葺きの「邦久庵」を設けた。主な著書に『大地に立つ』『軍艦「矢矧」海戦記』『二十一世紀は江戸に学べ』『次世代への伝言』『超高層から茅葺きへ』『建築家の畏敬』ほか多数。

戦後は「矢矧」最後の姿とともに困難を克服してきた

わたしの渋谷区神山町の家には、一般の住宅にあるような玄関というものがない。1957年に建てた建坪30坪ほどのこの家は、コンクリートブッロク造の最小限ローコスト住宅だが、竣工時と違うのは2階に書斎を増床したことと、木製のパーゴラを鉄製に替えたぐらいだ。柱や梁、屋根、内外装はもちろんのこと、庭に面した大きなガラス戸をはじめあらゆる木製の建具はまったくくるいがなく、今でもなに不自由なく使うことができる。

この庭に面した大きなガラス戸の中央にある片側1枚がわたしの家の入口である。来訪者は木蔦に覆われた塀の木戸をくぐると、庭に敷かれた素焼きレンガに沿ってパーゴラのあるレンガ敷きのテラスにたどり着き、靴を脱いでそこからリビングに入ることになる。リビングに入ると、真正面のコンクリートブロック壁に少し古びた1枚のモノクロ写真のパネルが掛かっている。もう半世紀以上、わたしがこの家を出入りするたびに眺めてきた1枚の写真だ。

木枠に几帳面に貼付けられた写真パネルは半切（B3）ほどの大きさで、パーゴラで日差しを防いでいるとはいえ、長年明るいリビングの壁に掛けられていたから少し変色してはいる。だが、この写真はわたしにとってはかけがえのない、人生でもっとも苦しい体験の瞬間をとらえたものであり、人生のなかで味わった多くの困難を、わたしはこの写真とともに乗り越えてきたのである。

1945年4月7日、戦艦「大和」、駆逐艦8隻とともに沖縄での洋上特攻作戦に向かった軽巡洋艦「矢矧」は、九州南部の東シナ海に接する海域で米軍雷爆撃機から猛烈な雷撃、爆撃を受け、立ちのぼる水柱のなかで多数の魚雷や爆弾直撃、至近弾を受けやがて壮絶な最後を遂げた。写真は米軍の苛烈極まる攻撃に耐えながら、最後の瞬間まで堪えながら戦い続ける「矢矧」の最後の姿である。この連載でもすでに述べたように、わたしは海軍士官として「矢矧」に乗艦し、「マリアナ沖海戦」（1944年6月）、「レイテ沖海戦」（1944年10月）の両海戦を経て「沖縄洋上特攻作戦」で戦った。この写真のなかの「矢矧」の艦橋で、わたしはまさに死ぬことを忘れるほど全身全霊をかけて戦い続けていたのである。

実は、わたしは最初からこの写真を自宅の入口に掛けていたわけではない。入居当初は一般家庭のように風景画を1枚掛けていたのだが、当時勤務していた設計事務所の役員との考え方の齟齬や、その後100名以上の同僚たちとともに独立し日本設計事務所を創設する前後の肉体的にも精神的にも苛まれていた頃のある日、わたしは帰宅するとすぐに書斎にあったこの「矢矧」最後の写真を取り出し、壁に掛かっていた絵画を取り外し交換したのである。

もちろん、苦しいときに見る写真としては、まさに撃沈されようとする悲壮な写真よりもむしろ、1942年10月に佐世保で進水を迎え、最新鋭艦として颯爽と海上を進む姿を記録した写真のほうがふさわしいと思う人は多いだろう。だが、わたしは迷わず、この悲壮な写真こそが、困難な状況に陥ったときに、必ずわたしに勇気を与えてくれるに違いないとわかった。以来わたしは、仕事でも私事でも苦しいときがあるとこの写真の前に立ち、「矢矧」の艦橋や撃沈後に海に漂ったときの苦しさや悔しさを思い出し、自分自身を奮い立たせてきたのである。

「矢矧」最後の戦いは、わたしの人生のなかで、間違いなく最も壮絶で悲惨な体験である。だが、それは生命がけで戦ったことや多くの戦友を失ったこと、大やけどを負い油の海で死を待つ肉体的・精神的苦痛、そして想像もしなかった「矢矧」撃沈に対する口惜しさからだけではない。「矢矧」はそれまでにも台湾沖では他艦が舳先を失うような猛烈な台風に遭遇しているし、「レイテ沖海戦」では「矢矧」における唯一のクラスメイトであった高角砲指揮官、伊藤中尉をはじめ、54柱の戦死者を出している。撃沈とまでは言わないが、それに近い体験はわたし自身、何度も味わってきているからだ。

この写真が最も悲壮な体験を思い起こさせ、半世紀以上にわたってわたしを勇気づけてくれた最大の理由、それは「祈り」にある。最新鋭の軍艦、徹底した訓練、人知による戦いへの鉄壁な備え、そのうえでわたしたちは、兵士1人ひとりが生命を捧げる代わりに、戦いの勝利を土着神や祖先神に祈った。わたしもまた、海軍時代は猛威を振う自然に常に向き合い、自然を司る神々に一心に祈った。ににもかかわらず「矢矧」は沈み、わたしたちは戦いに破れたのである。

太古の昔から自然の力に畏怖を抱き、海神や山神、祖先神に祈りを捧げ敬うことで、人びとの暮らしの安寧を求め、神の技に近づこうと技術と文化を高め、神々に寄り添いながら国を発展させてきた、それが日本人である。その神々が、わたしたちの祈りにもかかわらず、敗戦というさらなる試練をわたしたちに与えた。肉体的・精神的苦痛にも増して、これ以上辛いものはこの世にない。そう理解したときわたしは、壁の絵画の代わりにこの写真を掛けたのである。

神々に祈ることで日本の建築文化は質を高めてきた

精神などまるで役に立たず、物質だけが人びとを幸せにできる――。戦後、日本が否応なく受け入れた占領政策は、日本人の心を大きく変えた。戦後教育もまた、あらゆる古いものを否定・排除することが優先課題となり、太古の昔から日本に根付いてきた土着神や祖先神への祈りまで、戦前の帝国主義や軍国主義に強引に結びつけることで、根こそぎ否定してきたのである。そして日本人は神々への祈りを失う代わりにつかの間の自由を手に入れ、見事なほど個人主義が蔓延する社会をつくりあげた。

日本の建築もまた同様に、日本の長い歴史のなかで培われてきた伝統や文化をないがしろにするようになり、家々や集落など国のいたる所にあった祈りのための「精神的空間」が失われていった。戦後復興期から新しく設計されたほとんどの戸建住宅や集合住宅、地域社会、都市のなかから、精神的空間が排除されていったのである。住宅からは神棚や仏壇、仏間などの先祖や物故者の霊を祀る空間が徐々に失われ、地域社会からは森そのものに神が宿る「鎮守の森」や土地を護る神々のための聖域が消えていった。

身の回りから精神的空間を失った人びとは祈ることをやめ、太古から脈々と受け継がれてきた土着の自然神や祖先神との濃密だった関係が断絶され、希薄な関係にすり替わったのである。

旧家はもちろんのこと長屋や狭小住宅であっても、戦前に建てられた住宅には必ず家族が土着神や先祖神に祈り感応する精神的空間の設えがあった。例えば、一家の祝い事である子どもの入学や卒業、優秀な成績を納めたときは、賞状や免状を仏壇に供え、先祖神に報告することが日常的に行われていた。わたしも小学生の頃は、学期末になると学校からもらってきた通信簿を仏壇や神棚に供え、親と共に正座して深々と頭を下げ、親がご先祖さまに報告するのを神妙な思いで聞いていたものである。

また、お正月やお盆、お彼岸など季節の節目には、神前や仏前にお供え物をし、花を生けて手を合わせるのが当た

り前だったし、台所には火の神様、井戸には水の神様、手洗いにも神様がいて、それぞれの神様が住まいや家族を見守ってくれていることを感じていた。もちろん、今でも家のなかに精神的空間をきちんと設え、神々や祖先神に祈りを欠かさない家庭もあるだろうが、そうした精神的空間を重視することが建築教育のなかから欠落してしまっているので、設計者から積極的にそうした空間を提案すること自体がほとんどなくなっている。

明治期以降の近代合理主義の急速な導入と教育の普及によって、大正13年生まれのわたしでも、こうした土着神や精神的空間に懐疑的な思いを抱いた時期がなかったわけではない。だが、精神的空間で祈りの真似をしているだけでも、子どもの心には自然の脅威や神罰・仏罰を懼れる心が芽生え、悪いことをしてはいけないというメッセージがよく伝わってくる。同時に、そうした空間で神々を日常的に身近に感じることで、土地に伝わる貴重な土着文化や祖先たちの思いが不思議によく伝わってくるものなのだ。

身近な精神的空間を拠り所にして、日本人は子どものときからよりよいものを求めてきた。日本の伝統的な技術を持つ職人たちは、仕事の前には必ず神前や仏前に優れた作品を与えてくれるようにと祈ってきた。自分だけの技術力ではなく、自然に宿る土着の神々と一体となることで、自然や伝統の力を授かることができ、よい作品が生まれることを彼らは熟知しているからだ。

日本の伝統文化や伝統技術が活きる現代の技術や製品が世界中から高い評価を受けているのは、日本人の勤勉さだけではなく、こうした神々への祈りから得た力を活かしているからだ。身近な精神的空間を拠り所に神々に少しでも近づこうとすることで、文化はより高度なものになる。

ところが、近代合理主義の建築あるいは都市計画から完全に欠落、あるいは追放されてしまったこれらの精神的空間は、大学などで行われている建築や都市計画の教育のなかでも、今日ほとんど顧みられることはなくなってしまった。文化的側面を持つはずの建築が、文化の質を高めることができる術を自ら放棄してしまっているのである。

今日、大学などで行われている日本の近代建築教育は、土着神や祖先神への祈りを通じた日本古来の文化としての建築とはまったく断絶したうえで、西欧の建築技術の導入によって新たに誕生した特異な歴史を持っている。元々、近代合理主義に基づく近代技術文明は、土地性に束縛されない性格を持っているため、固有の気候風土から解放された自由な人工環境をつくり出すことが可能になり、日本の建築界はその方向で邁進しているように見える。

だが、その一方で日本の建築は、本来内在し建築の質を高めてくれるはずの風土や歴史に培われた文化的側面をないがしろにしてしまう危険性をはらんでいる。建築をはじめとする日本の戦後復興が、経済効率のよい工業化を図ることで成し遂げられたことは事実だが、物質的な繁栄と引き換えに日本の美しい海・山・川の風景を変え、わたしたちの祖先が営々と築き上げてきた文化的遺産を簡単に捨て去ってきたことを、わたしたちはもういちど考え直す必要がある。

実は、かく言うわたしも、子どもから海軍時代までは常に自然に向き合い祈りを欠かかすことはなかったのだが、戦後復興期や高度成長期に建築の世界で少しでも貢献しようと努力するうちに、いつの間にか「精神的空間」の発想を見失っていたことがある。家の入口に掲げた軍艦「矢矧」最後の姿は、そのことを再び気づかせてくれるきっかけにもなったのである。

地域共同体の精神的空間「鎮守の森」を再生させる

ウィンストン・チャーチル（1874-1965）は「人は建築をつくり、建築は人をつくる」という名言を残している。建築物の中で成長するなかで人間は、色々な出来事や出会いを経験しさまざまな影響を受ける。家族や友人、生活空間、音・光・風など、経験し感じるものすべてが、その人の人格形成に影響を与える。つまり建築は“人の心”をつくるということであり、これは洋の東西を問わず真理であると思う。その人間のいちばん大切な心をつくるためには、家のなかに心の拠り所となる精神的空間が欠かせない。神棚や仏壇・仏間など、心を培う住まいこそが日本の建築の原点なのである。

もう1つ日本の建築には欠かせない要件がある。それは建築を包む周辺環境だ。暮らしのなかにひときわ自然を取り入れて暮らす日本人にとって、周辺の自然環境は建築内部と同等に、いやそれ以上の価値を持つ。そして、そこには「鎮守の森」というもう1つの精神的空間が存在し、日本人は建築の内と外との2つの精神的空間で祈りを捧げながら、安寧を願い固有の文化を高めながら世代を受け継いできたのだ。

自然の生態系を凝縮した空間、それが鎮守の森である。現在よく見られる鎮守の森は、社殿様式の神社のお社（やしろ）を青々とした森林が囲んでいるあり様だが、より時代を遡った古神道の時代には拝殿の建物はなく、森林そのものや森林に覆われた土地、山岳、巨木、巨石、海、岩礁、河川、滝などの自然そのものが信仰の対象になっていた。こうした古の鎮守の森の形は、いまも神木や霊石として人びとの祈りの場として残っているところもあるが、鎮守の森の“鎮守”には、荒ぶる土着の神をしずめ、国や村落などの地域共同体を護る意味があるようだ。

また、対談したことがある植物生態学者の宮脇昭氏によれば、弥生時代に農耕生活が始まり森林を破壊しながら耕地を広げ集落やまちをつくる一方で、わたしたちの祖先はふるさとの木によるふるさとの森をつくってきた。それが鎮守の森になり、森そのものに神が宿るとして祀られるようになったのだと言う。森林を破壊するだけでなく同時に森林をつくってきた民族は、世界中を見渡しても日本人だけだそうで、それだけに鎮守の森は、何千年にもわたって受け継がれてきた日本固有の精神的空間なのである。

いずれにしろ、かつてわたしたちの身近にあった鎮守の森は、地域に住む人びとが集まり、鎮守の森にいる神様の前にお供物とともに収穫や安全への感謝を述べ、子どもたちの将来を祈願する祈りのための精神的空間であり、人びとは喜びのなかで神と契りを結ぶための祭りを定期的に催してきた。そうした精神的空間が小さな集落のなかにもあり、それぞれの集落が自らの誇りとする土着文化を形成してきたが、戦後の経済効率の追求と暮らしの西欧化によって、人びとの暮らしや関心のなかから急速に失われていったのである。

経済効率一辺倒でまちが取り残され、衰退を止める術さえ見つからない崩壊寸前の共同体を救う手だては、地域の鎮守の森を復活させる以外には見当たらない。それは今後確実に超高齢化と人口減少を迎えることになる、日本のあらゆる地域共同体にとっても同じことだ。鎮守の森を復活させることで歴史的な地域固有の文化の質がより高まるのであれば、その担い手となる人たちが地域に魅力を感じて喜んで集まってくるからだ。

日本の建築界もまた、住宅設計のなかに神棚や仏壇・仏間などの発想を持ち、まちづくりのなかで鎮守の森の復活を積極的に提案していくことが急務である。地域の活性化だけでなく、精神的空間での土着神や祖先神との交感からは素晴らしいアイデアが生まれ、質の高い商品や技術が生まれる可能性が高まるからだ。そうした魅力のある日本を目指し、多くの外国人が仕事や観光で集まってくるだろう。

もう1つ重要なことは、建築に限らずそうした精神的空間で神々との交感から生まれた固有の伝統や技術を、次代にどのように承継していくかである。どれだけ質が高く素晴らしい伝統や技術があっても、それが承継されなければ途絶えてしまう。数千年にわたり承継されてきた価値あるものが、わたしたちの時代で途絶えさせてしまうのは、あまりにも情けない話である。

2001年、長崎県大村湾にわたしが建てた「邦久庵」は、当初はモダンな設計を進めていたが、現地で出会った地元の棟梁から、注文がないために地元に伝わる伝統的な和小屋の建築技術が自分の代で途絶えるのは忍びないという話を聞き、急遽、和小屋で建てることにした。わたし自身、近代建築に強い疑問を感じていた時期だったので、地域の風土に合った長い年月を経て受け継がれてきた徹底した伝統的構法で、地元の材料を使い地元の大工さんに建ててもらいたいと考えたのである。その結果、見事に釘1本使わずに茅葺き屋根の日本の伝統的な住宅を建てていただいた。

棟梁の4人の弟子には直接伝えることができたが、コスト高のためか、「邦久庵」をモデルハウスにして新たな受注をという目論みまではかなわなかった。オランダのように文化的価値のある船大工の技術伝承を保護する制度があればよいのだが、日本の建築にはそうした制度はなく、多くの地域で固有の伝統的な技術が失われていくのは実に惜しい気がする。

ただ、「邦久庵」があるうちは少なくとも固有の伝統的な構法や技術を実際に見て確かめることはできる。そうした方法でもいいから、長い時間をかけて培われてきた伝統的な構法や技術が、次代に受け継がれていくことを心から願っている。（談）

＊編集部注：本稿は池田武邦先生への最新のインタビューを基に編集部で書き起こしたものであり文責は編集部にあります。